

1 全日制課程について

第1通学区は、中学校卒業生数が平成17年と比較し平成31年には8割程度となる。

特に飯山市周辺の中学校卒業生数は、平成31年には現在の53%程度まで減少し、この地区の募集学級数は6学級程度となることが推測される。この地域に現在設置されている4校をそのまま維持した場合、1校あたり1学年2学級を下回ることとなる。また、現在設置されている特色学科を有効に活かして学びの選択肢を提供しつつ、教育の質を確保する観点から、飯山照丘高校、飯山北高校、飯山南高校の3校を統合する必要があると考えられる。3校の統合に際し、現有施設の状況から、当面は飯山北高校と飯山南高校の校舎を利用し、将来的には、入学者数の推移により両校を統合し、地理的条件の良い飯山北高校の校舎・校地を活用して、地域の生徒を育てる新たな高校としていくことが候補として考えられる。

中野市、須坂市を中心とした地区は、中学校卒業生数が平成17年から平成31年にかけて76%程度となり、飯山市周辺に次いで減少率が高い。この地区は、現在7校が設置されているが、平成31年には全体で27学級程度の募集となることが推測されるため、再編整備が必要と考えられる。特に中野市内校の小規模化が懸念されるため、一定程度の学校規模を確保しつつ、地域の生徒に普通科と専門学科の特色を活かした多様な教育を展開することにも配慮して、近距離にある中野高校と中野実業高校を統合し、施設設備の整備された中野実業高校の校舎・校地を利用することが候補として考えられる。また、この高校は、単に中野市の新たな高校というだけでなく、長野市では市立皐月高校が総合学科への転換を決めていることから、地理的な条件を考慮すると、第1通学区の総合学科高校の候補とすることが考えられる。

長野市、千曲市周辺の高校の多くは、長野市から上田市をつなぐ鉄道沿線にあり、流出入が激しく、同じ通学圏域と見ることできる。この地区では、平成17年から平成31年にかけて800名程度が減少し、この地区の募集学級数は、現状の89学級から平成31年には75学級に減少することが推測される。現在16校が設置されているが、13校程度の設置が適切であると考えられる。また、中学生の進路動向から、中山間地からも長野市内へは通学可能な圏域となっていることが示されている。

こうした状況の中で、中条高校と犀峽高校の現状は、生徒在籍数が1学年2学級規模を下回り、地元中学校卒業生数の減少により、小規模化がさらに進み、教育活動の活力低下が生じることが懸念される。将来を見通すと、地理的な条件から犀峽高校の校舎・校地を利用して両校を統合し、地域特性を活かした魅力づくりを図り、新たな高校として設置していくことが候補として考えられる。

また、中学生の進路動向に配慮すると、長野市南部から長野市北部の高校へ多く入学していることから、長野市北部の各校の募集定員を維持しながら、長野市南部の長野南高校と松代高校を統合し、地理的な条件から松代高校の校舎・校地を利用することが候補として考えられる。両校が実践しているこれまでの取り組みを活かした新たな高校の設置が期待できる。

第1通学区の多部制・単位制高校の候補として、坂城高校の全日制を転換することがあげられる。坂城高校は、交通の利便性から通学圏域が広く、地域からの支援や産業との連携による体験的な教育を展開でき、多様な学習歴・生活歴をもつ生徒の向学心を育成することが期待できる。

2 定時制・通信制課程について

第1通学区の定時制は、坂城高校が多部制・単位制高校の独立校として転換した場合、長野吉田高校、長野商業高校、篠ノ井高校の定時制を坂城高校に統合することが考えられる。統合を考える際、夜間定時制は、勤労青少年のための学び舎であるという観点から、通学圏域内の適所に配置しておく必要がある。中野高校と中野実業高校の統合校、長野高校、長野工業高校の夜間定時制が、その候補として考えられる。

通信制課程は、現在、長野西高校に設置されているが、全日制の生徒数が多く、通信制の校舎は全日制と共用しているため、通信制の生徒の学習環境として最適とはいえない。そこで、長野西高校の通信制課程を、多部制・単位制の坂城高校に移し、多部制や定時制との連携による柔軟な単位取得や合同授業・行事の実施等を行い、東北信の通信制課程の中心校として坂城高校を考えていくことができる。

1 全日制課程について

上小地域では今後の生徒数の動向を勘案すると、現在の学校数を維持していくことが適切であると考えられる。

小諸、佐久地域では中学校卒業生数が平成31年には平成17年と比べて8割程度となり、地域全体の募集学級数はおよそ10学級程度減少することが推測される。

佐久市・北佐久郡の西部地域では、比較的近い距離に小規模な望月高校と蓼科高校が設置されているが、今後の生徒数の推移から小規模化がさらに進むことが懸念される。将来を見通した場合、この2校を統合して、一定規模の生徒数を確保しつつ、地域特性を生かした魅力づくりを推進していくことが望ましいと考えられる。その際、現在の入学者の状況等から蓼科高校の校舎・校地を活用していくことが候補として考えられる。

旧佐久市内でも、今後の生徒数の減少から、現在設置されている4校の再編整備をしていく必要があると考えられる。また、第1通学区に設置される多部制・単位制高校が、上田市周辺からも通学可能な坂城高校である場合、第2通学区の生徒の通学圏域を考慮すると、佐久市内に多部制・単位制高校を設置することが考えられる。これらの状況から旧佐久市内4校のうちの1校を多部制・単位制高校へ転換していくことが考えられる。その候補として、交通の利便性がよく、小諸・佐久地域の広範囲から通学可能なことや現在も定時制課程が設置されていることなどから、野沢南高校をあげることができる。多部制・単位制の単独の高校に転換した野沢南高校を、東信地区における、多様な生徒のニーズに柔軟に応えられる定時制の中心的高校とすることが考えられる。

第2通学区に設置する総合学科高校については、普通科の他に専門学科を複数持つ丸子実業高校を転換していくことが候補としてあげられる。現在の丸子実業高校が持つ施設設備や各学科の多彩な教育内容を、総合学科の教育課程の編成に活かしていくことが期待できる。

2 定時制・通信制課程について

第2通学区には、定時制課程が現在4校に設置されている。第1通学区の多部制・単位制高校が坂城高校である場合、上田千曲高校と上田高校の定時制課程は、在籍する生徒の現状や地理的に近い状況を考慮し、柔軟に通学時間帯を選択できる坂城高校へ統合していくことが考えられる。

第2通学区に設置する多部制・単位制高校の候補である野沢南高校では、第1通学区の多部制・単位制高校に併設される通信制課程とも連携を図り、スクーリング会場として活用していくことも考えられる。

1 全日制課程について

第3通学区は、南北に広い通学区であり、地区により中学校卒業生数や推定募集学級数の推移の状況が異なる。通学区全体としては、中学校卒業生数が平成31年には平成17年と比べて9割程度となり、募集学級数は15学級程度減少すると推測されるため、地勢的条件を考慮しつつ、質の高い教育を提供していく観点から、県立高校の再編整備が必要であると考える。

諏訪市、岡谷市、茅野市周辺では、中学校卒業生数の減少率が低く、当面現状の校数を維持していくことが適切であると考えられる。

上伊那地域における募集学級は、平成31年には平成17年と比べて6学級程度減少することが推定されることから、この地域においては再編整備が必要となる。そこで、箕輪工業高校の全日制課程の募集を停止し、第3通学区の多部制・単位制高校として転換することが候補として考えられる。箕輪工業高校は、第3通学区のほぼ中央に位置し、比較的広範囲から通学が可能であるとともに、現有の施設設備を活用して、上伊那の産業界や地域との連携・協力を行うことにより魅力ある教育課程の編成や体験的な教育を展開する高校づくりが期待できる。

また、駒ヶ根市には、現在、赤穂高校と駒ヶ根工業高校が配置されているが、生徒数の減少などを考慮して2校を統合し、両校が培ってきた教育資源を活用して、多様な学びの選択を可能とする新たな高校として設置することが考えられる。その場合、駒ヶ根工業高校の保有する施設設備等の有効活用を図りながら、駒ヶ根工業高校を赤穂高校に統合することが候補としてあげられる。

下伊那地域における募集学級は、現在に比べ平成31年には7学級程度減少することが推定されることから、この地域においても再編整備が必要となる。そこで、飯田市内で比較的近距离にある飯田長姫高校と下伊那農業高校を統合し、新たな高校を設置することが考えられる。その際、校地の広い下伊那農業高校の施設設備を統合後の校舎・校地として整備していくことが候補としてあげられる。また、現在、第3通学区と隣接する塩尻市に、総合学科の塩尻志学館高校が設置されていることから、地理的に多くの生徒が総合学科を選択できるように配慮すると、第3通学区では下伊那地域のこの新たな高校を、総合学科高校の候補とすることが適切であると考えられる。飯田長姫高校と下伊那農業高校の専門教育に関わる教育資源を有効に活かした、魅力ある総合学科となることが期待できる。

2 定時制・通信制課程について

多部制・単位制高校を箕輪工業高校に設置した場合、比較的近距离にある上伊那農業高校の定時制は、多部制・単位制高校に統合し、多様な生徒のニーズに応えられるような教育を展開することが考えられる。

また、下伊那地域における定時制の充実を図るため、飯田長姫高校と下伊那農業高校を統合した新たな学校に定時制課程を設置し、飯田工業高校の定時制を統合して、多様な生徒のニーズに応えることができる、柔軟な教育を行う定時制としていくことが考えられる。

第3通学区の多部制・単位制高校と各定時制高校は、相互に連携をとって教育を展開することや、第4通学区に設置される中南信の通信制課程中心校のスクーリング会場としても利用していくことが考えられる。

1 全日制課程について

第4通学区は、中学校卒業生数の減少により、平成31年には現在より募集学級数が10学級程度減少することが見込まれるため、地域ごとの実情を考慮しつつ、質の高い教育を提供していく観点から再編整備が必要であると考えられる。

木曽地域は第4通学区の中でも中学校卒業生数の減少率が最も大きい地域である。平成31年には平成17年と比べて6割程度となり、地域全体の募集学級数は4学級程度減少することが予想される。このことから、よりよい教育環境を整えるためにも、比較的近接している木曽福島町内の木曽高校と木曽山林高校を統合することが考えられる。

魅力づくりをより一層推進する観点から、地域の自然や環境などを積極的に活用するとともに、木曽高校の保有する施設設備等の有効活用を図りながら、木曽高校を木曽山林高校に統合することが候補としてあげられる。その際、木曽山林高校がこれまでに培ってきた林業に関する専門教育をさらに充実・発展させていくことが考えられる。

第4通学区の多部制・単位制高校の候補としては、松本筑摩高校があげられる。松本筑摩高校は、すでに昼間定時制課程、夜間定時制課程、通信制課程を設置し、単位制も実施していることから、全日制課程を廃止し、新たに多部制・単位制の独立校として配置し、第4通学区の定時制・通信制の中心校として充実させていくことが考えられる。

大北地域の今後の中学校卒業生数の推移を考慮すると、所在する4校の小規模化が懸念されるため、この地域においても再編整備が必要であると考えられる。この地域の中で、一定規模の生徒を確保し、活力のある学校づくりを進めていくために、統合する候補としては、近接距離にある大町高校と大町北高校の2校があげられる。大町駅からの距離等の地理的条件を考慮し、大町高校を統合後の校舎・校地の候補とすることが考えられる。

また、第4通学区内の総合学科については、すでに塩尻志学館高校に設置されていることから、当面は、現在ある高校を新たに転換していく必要はないと考えられる。

2 定時制・通信制課程について

第4通学区の多部制・単位制の独立校が松本筑摩高校に設置された場合には、比較的距離にある松本工業高校の定時制課程は、松本筑摩高校に統合し、多様な生徒のニーズや、多様な学習歴・生活歴の生徒に対応していくことが考えられる。

木曽高校の定時制課程は、木曽高校と木曽山林高校の統合した学校に設置し、第4通学区の多部制・単位制高校と連携するとともに、通信制課程のスクーリング会場としても利用していくことが考えられる。